

2022年5月29日(日)礼拝メッセージ

聖書箇所:エレミヤ書6章1～15節(エレミヤ書講解説教14回目)

タイトル:「偽りの平安」

エレミヤ書6章に入ります。今日のタイトルは「偽りの平安」です。14節に「**彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒し、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。**」とあります。「彼ら」とはエレミヤの時代の預言者たちのことですが、彼らはみな偽りを言っていて、本当は平安じゃないのに「平安だ、平安だ」と言っていました。いわゆる偽りの平安です。私たちはこうした偽りの平安ではなく本物の平安、主が与えてくださる平安をいただいて、世の終わりの混迷した時代にあってもハレルヤ！と主を賛美し、感謝して歩む者でありたいと思います。

三つのことをお話します。第一に、平安ではなかった神の民、エルサレムの住民たちの姿です。彼らは悪に満ちていたので、神は北からわざわいを、大いなる破壊を宣言されました。その悪は井戸水が湧き出るようにコンコンと湧き出ていました。

第二のことは、その原因は何でしょうか。それは、彼らの耳が閉じていたことです。それで聞くことができませんでした。聞き従うためには耳が開かれていなければなりません。耳に割礼を受けなければならないのです。

第三のことは、そのためにどうしたらよいかということです。そのためにはイエス・キリストを信じなければなりません。彼らは平安がないのに、「平安だ、平安だ」と言っていました。しかし、真の平安は、平和の君であるイエス・キリストによってのみもたらされるからです。

## I. 湧き出る悪(1-8)

まず、1～8節までをご覧ください。5 節までをお読みします。「**1 ベニヤミンの子らよ、エルサレムの中から逃れ出よ。テコアで角笛を吹き、ベテ・ハ・ケレムでのろしを上げよ。わざわいが**

北から見下ろしているからだ。大いなる破壊が。2 娘シオンよ、おまえは美しい牧場にたとえられるのではないか。3 そこに羊飼いたちは自分の群れを連れて行き、その周りに天幕を張り、群れの羊は、それぞれ自分の草を食べる。4 「シオンに向かって聖戦を布告せよ。立て。われわれは真昼に上ろう。」「ああ、残念だ。日が傾いた。夕日の影が伸びてきた。」5 「立て。われわれは夜の間の上って、その宮殿を滅ぼそう。」

エレミヤは、1章で預言者としての召命を受けると、2章から神のことばを語りますが、きょうの箇所はそのまとめの部分です。主はご自身に背いたユダの民に神のさばきを語ってきましたが、それを具体的な描写をもって語るのです。

1節には「**ベミヤミンの子らよ**」とあります。「ベミヤミン」とは、エルサレムに住んでいた人々のことを指しています。というのは、エルサレムはベニヤミンの領土にあったからです。このベニヤミンの子らに、エルサレムの中から逃れるようにとされているのです。なぜなら、わざわざいと大いなる破壊が北からやって来るからです。これはバビロン軍のことを指しています。バビロン軍がやって来て彼らを破壊しようとしていたので、そこから逃れるようにと言っているのです。

「**テコアで角笛を吹き、ベテ・ハ・ケレムでのろしを上げよ。**」「テコア」とは、エルサレムの南約20kmに位置する町です。エルサレムよりも荒野に近い所だったので、そこに逃れた方が安全だということです。

「**ベテ・ハ・ケレム**」とは、はっきりとした位置はわかりませんが、エルサレムとテコアの間にあった町ではないかと考えられています。ここでは、のろしをあげよとされています。のろしを上げるとは、敵の攻撃に備えて警戒態勢に入れということです。今で言うと、緊急地震速報みたいなものです。昔はスマホがなかったのでのろしを上げて合図をしたのです。そののろしは10~20Km先からも見えたと言われています。こうしたのろしを上げて北から見下ろして、大いなる破壊、バビロン軍の攻撃に備えよということです。

2節をご覧ください。「娘シオン」とは、「エルサレム」の別の呼び方です。ですから、これは1節の「ベニヤミン」とも同義語となります。そのシオンが、「美しい牧場」にたとえられています。そこに暮らす民は美しい羊たちでした。本来であれば、羊飼いたちは自分の群れの羊たちを連れて行き、その周りに天幕を張り、そこで草を食べるようにするわけですが、今回はそうではありません。そのシオンに向かって聖戦を布告せよ、とされているのです。

4,5節です。「シオンに向かって聖戦を布告せよ。立て。われわれは真昼に上ろう。」「ああ、残念だ。日が傾いた。夕日の影が伸びてきた。」「立て。われわれは夜の間の上って、その宮殿を滅ぼそう。」「どういことでしょうか。

聖書で「羊飼い」というと、イスラエルの王や預言者といった霊的リーダーたちのことを指していますが、ここでは別の人のことを指しています。それはバビロンの王ネブカデネザルのことです。彼は羊たちを緑の牧場にふさせ、いこいのみぎわに伴うどころか、その美しい牧場、神の民に対して聖戦を布告するのです。そのように命じているのはイスラエルの神、主です。主がバビロンの王ネブカデネザルに、イスラエルに向かって聖戦を布告せよ、と言われたのです。ですから、ここに「聖戦」とあるのです。「聖戦」とは神の戦いのことです。一般的には神の民が外国の民に対して行うものですが、ここでは逆です。バビロンが神の民に対して戦う戦いを聖戦と呼んでいます。なぜなら、それが聖なる神によって命じられたものだからです。そうです、これは神が主導された神の戦いなのです。神の民であるイスラエルを懲らしめるために、神が外国のバビロンを用いられるのです。それはどのような戦いでしょうか。

4 節には「われわれは真昼に上ろう」とあります。そして5節には「われわれは夜の間の上って」とあります。通常は朝から戦闘が始まり夕方には終わりました。その間日中はかなり暑くなるので少し休んだりするわけですが、この敵はそうではありません。ここに「真昼に上ろう」とあるように、休まずに攻撃するのです。これは、通常ではあり得ない力を持っているということを表しています。また「夜の間の上って」とは、昔は懐中電灯のようなものがなかったので夜の間には戦うことはありませんでしたが、この敵は違います。夜の間も上って来るのです。ものすごいパワーです。そんな敵が攻め寄せて来たら、たまったものではありません。

6節をご覧ください。ここで万軍の主がこう言われます。「木を切って、エルサレムに向かって壘を築け。これは罰せられる都。その中には虐げだけがある。」

これは誰に対して語られているのでしょうか。そのバビロンに対してです。バビロンに対して「木を切って、エルサレムに向かって壘を築け。」というのです。「壘を築け」とは、英語で「mounds」(マウンド)です。盛土とか、土手、土塁のことですね。野球のピッチャーが投げるところをマウンドと言いますが、それは盛土された所だからです。ここでは土ではなく木でそれを築くようにと命じられています。木を切って、エルサレムに向かって壘を築くようにと。エルサレムは城塞都市でしたから、たやすく攻めることができませんでした。それで木を切って来て、それで城壁よりも高い物見やぐらのようなものを作り、そこから侵入して攻撃するようというのです。これを命じておられるのは万軍の主です。万軍の主である神様が、ご自分の民であるエルサレムを攻撃するために、その戦術をバビロンに語っているのです。ですから、4節に「聖戦を布告せよ」とありましたが、これは皮肉でも何でもなく、エルサレム、ユダの民に対する神の戦い、聖なる戦争だったのです。主はそのためにバビロンを用いました。主は外国の敵を用いて神の民を罰しようとしたのです。なぜなら、彼らは罪と悪によって腐敗していたからです。

それがどのようなものであったかが7節に説明されています。「井戸が水を湧き出させるように、エルサレムは自分の悪を湧き出させた。暴虐と暴行がその中に聞こえる。病と打ち傷がいつもわたしの前にある。」

井戸の水が湧き出るように、エルサレムは自分の悪を湧き出させていました。神が彼らをさばかれるのは、彼らの中に井戸水のように悪がコンコンと湧き出ていたからです。表面的にではなく、根っこが腐っていたわけです。彼らの内側には暴虐と暴行に満ちていました。それが病と打ち傷となって外側に溢れていたのです。悪は外側からではなく内側から出るものです。イエスは、マルコ7章14～23節でこのように言われました。「14 イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。15 外から入って、人を汚すことの

できるものは何ともありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」17 イエスが群衆を離れて家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。18 イエスは彼らに言われた。「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか。外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。19 それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」こうしてイエスは、すべての食物をきよいとされた。20 イエスはまた言われた。「人から出て来るもの、それが人を汚すのです。21 内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行い、盗み、殺人、22 姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、23 これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです。」

皆さん、人を汚すのは外から入ってくるものではありません。人の内側から出るものが人を汚すのです。悪いことをするから罪人なのではなく、罪人なので悪いことをするのです。それは心から、内側から出ます。見た目にはいくらでもよく見せることができます。立派に振る舞うことができます。しかし神は心を見られます。心は人の努力できよめることはできません。心をきよめることができるのは、イエス・キリストだけです。

私たちはこの罪のために、悪が井戸水のようにこんこんと湧き出てくるような者ですが、神はこんな私たちをあきらめることはなさいません。そんな者でも癒してくださると約束しておられます。「あなたがたは、反抗に反抗を重ねてなおも、どこを打たれようというのか。頭は残すところなく病み、心臓もすべて弱っている。足の裏から頭まで健全なところはなく、傷、打ち傷、生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない。」(イザヤ1:5-6)

「さあ、来たれ。論じ合おう。—主は言われる— たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」(イザヤ1:18)

たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。足の裏から頭のとっぺんまで健全なところはなく、傷、打ち傷、生傷が絶えず、絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえないような私たちでも、主は招いておられるのです。そして、その罪を雪のように白くして下さいます。羊

の毛のようにしてくださるのです。その声を聞いて、神に立ち返る人は幸いな人です。

8 節をご覧ください。ここには「エルサレムよ、懲らしめを受けよ。そうでないと、わたしの心はおまえから離れ、おまえを、人も住まない荒れ果てた地とする。」とあります。

これは神の懲らしめ、Discipline です。ここには親が子どもをしつけるというニュアンスがあります。愛する子がダメにならないように叱る親のように、神様はご自分の子に懲らしめを与えられるのです。子どもに向かって親が「きちんとしなさい」と言うように、神はご自分の民に言われるのです。「そうでないと、わたしの心はおまえから離れ、おまえを、人も少ない荒れ果てた地とする。」

原文では「そうでないと」ということばが2回使われています。「そうでないと、わたしの心はお前から離れ、そうでないと、おまえを、人もすまない荒れ果てた地とする。」と。ここまで来てもあきらめない神の思いが表れています。神様はギリギリまで待っていてくださるのです。

ここで注目していただきたいことばは「離れ」ということばです。これは脱臼するという意味の語で、聖書には、ここともう1箇所しか出てこない珍しい言葉です。神と民がどれほど深く結びついているかが表されているのです。それほどまでに、神が民をさばくということは辛いことなのです。不本意ながらも離さなければならないという、神様の悲痛な思いが伝わってきます。なぜなら、彼らが汚れたままであることを選ぶからです。自分の悪を悔い改めことを拒むからです。

神様はきよい方です。罪、汚れと交わることはできません。ですから、私たちの罪がきよめられなければならないのです。そうすれば、神から離れることはありません。脱臼することはないのです。強く結びついたままでいることができます。この神の思いを受け止めて、神に立ち返り、罪を赦していただいて、神と深く交わる者でありたいと思います。

## II. 閉じたままの耳(9-10)

第二に、彼らが悪に満ちるようになった原因です。いったいどうして彼らは神から離れてしまったのでしょうか。それは、彼らの耳が閉じられていたからです。9～10節をご覧ください。「9 万軍の主はこう言われる。「ぶどうの残りを摘むように、イスラエルの残りの者をすっかり摘み取れ。ぶどうを収穫する者のように、あなたの手をもう一度、その枝に伸ばせ。」10 私はだれに語りかけ、だれを諭して聞かせようか。見よ。彼らの耳は閉じたままで、聞くこともできない。見よ。主のことばは彼らにとって、そしりの的となっている。彼らはそれを喜ばない。」

「ぶどうの残りを摘むように、イスラエルの残りの者をすっかり摘み取れ。」とは、ぶどうを収穫する際に隅々まで摘むように、イスラエルの民をすっかり摘み取れということです。ユダの民はバビロンの攻撃によって完全に滅ぼされ、その住民はバビロンへと連れて行かれます。この「イスラエルの残りの者」は、4章7節や5章18節で見てきた残りの者、レムナントのことではありません。ここで言われていることは、バビロンの破壊は徹底的であるということです。エルサレムはもう完全にバビロンの手に落ちるということです。

10節をご覧ください。主はエレミヤに語っています。「私はだれに語りかけ、だれを諭して聞かせようか。見よ。彼らの耳は閉じたままで、聞くこともできない。見よ。主のことばは彼らにとって、そしりの的となっている。彼らはそれを喜ばない。」

主はエルサレムの住民に語って聞かせたいのですが、だれも聞こうとしませんでした。聞く耳を持たなかったのです。完全に耳を塞いでいました。だれ一人として聞きませんでした。そんな人たちにエレミヤは40年以上も語り続けるのです。私は一昨日牧師になって日曜日の礼拝で説教をするようになって39年間になりましたが、エレミヤは40年以上です。どれほど大変だったかと思えます。主のことばは彼らにとって、そしりの的となっていました。彼らはそれを喜びませんでした。語っても馬鹿にされていたのです。

ここで注目していただきたいのは、「耳は閉じたままで」ということばです。これは下の欄外の説明にあるように、直訳では「耳に割礼がなく」です。無割礼なのです。割礼とは、男性の性

器の包皮を切り取ることです。ユダヤ人の男子はみな、自分たちが神の民であるというしるしに、生まれて 8 日目にこの儀式を行いました。その割礼が耳にないということです。実は4章4節にもこの割礼について勧められていました。「**主のために割礼を受け、心の包皮を取り除け。**」大切なのは肉体の割礼ではなく心に割礼を受けるということです。いくら肉体に割礼を受けていても心が肉で覆われていたら、神のことばが心に響きません。何を言っているのか全く理解できないのです。まあ、語っている側の問題もありますが、一番大きな問題は、聞く人の耳が肉で覆われていることです。耳が肉で覆われると鈍感になってしまいます。それで何を言っているのかわからないのです。だから心の包皮を取り除け、心に割礼を受けよ、と言われたのです。ここでも同じです。耳の場合も割礼を受けていないと聞こえません。イスラエルが神から離れてしまった原因は何だったのでしょうか。ここにありました。耳に割礼を受けていなかったことです。彼らの耳が閉じられていました。音声としては聞こえていましたが、それがどういうことを聞こうとしていなかったのです。聞く耳を持っていなかったということです。もっといふなら、聞き従う耳を持っていなかったということです。それが「耳に割礼がなく」とか「耳が閉じられたままで」あったということの意味です。まさに耳は従順さとか服従さが表れる場所なのです。聞いたら従うのです。聞いても従っていないというのは聞いていないということです。聞こえていないのです。

あなたの耳はどうでしょうか。だんだん耳が遠くなってきていると感ずることがあります。でもそれは年のせいではありません。心が遠くなっているからです。神から心が遠く離れていると耳も遠くなってしまいます。前はもっとはっきり聞こえたけど、今は耳が遠くて何を言われているのかわかりません。以前は聖書を読んでいても、敏感に自分へのメッセージをキャッチできたのに、今はどこを読んでも無味乾燥です。全然心に響かないんです、というのは、耳が肉で覆われているからです。耳カスがたまっているからではありません。耳が肉で覆われているからなのです。ですから、耳に割礼を受けなければなりません。そうすれば、よく聞こえるようになります。



イエス様は種まきのたとえの中でこう言われました。「茨の中に蒔かれたものとは、みことばを聞くが、この世の思い煩いと富の惑わしがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」(マタイ13:22)

みことばを聞いても、この世の思い煩いと富の惑わしがみことばをふさぐと、実を結びません。これらのものもみことばをふさぐため、聞くことができないのです。私たちにはいろいろな思い煩いがありますね。仕事のことや家庭のこと、病気や人間関係の問題、またコロナや戦争といった不安や恐れもあります。あるいは、後悔といったこともあるでしょう。そのような思い煩いや富みの惑わしがあると、それらがみことばをふさいでしまうので実を結ぶことができないのです。だから、耳に割礼を受けなければなりません。

聖書はこう勧めています。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。( I ペテロ5:7)

あなたの思い煩いを、いっさい神にゆだねてください。そうすれば、神があなたのことを心配してくださいます。私たち人間には、どうすることもできないことがたくさんあります。それらのことをいくら心配しても、なんの益ももたらしません。それよりは、神の恵みを受け取り、すべてを神にゆだねた方がいいのです。なぜなら、神が私たちのことを心配していただくからです。

### Ⅲ. 平和の君イエス・キリスト(11-18)

ではどうすればいいのでしょうか。ですから第三のことは、イエス・キリストを信じなさいということです。11~18節をご覧ください。「11 主の憤りで私は満たされ、これを収めておくのに耐えられない。「それを、道端にいる幼子の上にも、若い男がたむろする上にも、注ぎ出せ。夫はその妻とともに、年寄りも齢の満ちた者も、ともに捕らえられる。12 彼らの家は、畑や妻もろとも、他人の手に渡る。わたしがこの地の住民に手を伸ばすからだ。—主のことば—13 なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得を貪り、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。14 彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒やし、平安がないのに、

『平安だ、平安だ』と言っている。15 彼らは忌み嫌うべきことをして、恥を見たか。全く恥じもせず、辱めが何であるかも知らない。だから彼らは、倒れる者の中に倒れ、自分の刑罰の時に、よろめき倒れる。一主は言われる。」16 主はこう言われる。「道の分かれ目に立って見渡せ。いにしえからの通り道、幸いの道はどれであるかを尋ね、それに歩いて、たましいに安らぎを見出せ。彼らは『私たちは歩まない』と言った。17 わたしは、あなたがたの上に見張りを立て、『角笛の音に注意せよ』と命じたのに、彼らは『注意しない』と言った。18 それゆえ、諸国の民よ、聞け。会衆よ、知れ。彼らに何が起こるかを。」

みことばを聞こうとしないユダの民に対して、エレミヤの心は主の憤りに満たされました。もうそれを自分の心に収めておくことができませんでした。だれも聞いてくれないのです。完全にバーン・アウトしました。燃え尽きてしまいました。疲れ果ててしまったわけです。

すると主はエレミヤに、「それを、道端にいる幼子の上にも、若い男がたむろする上にも、注ぎ出せ。」と言われました。「それ」とは主の憤りのことです。それを道端にいる幼子の上にも、若い男がたむろする上にも、注ぎだすようにと言われたのです。幼子や若い男たちだけではありません。夫も妻も、年寄りも、ひじょうに齢の進んだ人も捕えられます。さらに、彼らの家と畑は、妻もろとも奪われ、他人の手に渡ることになります。

どうしてでしょうか。13 節にその理由が述べられています。「なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得を貪り、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。

身分の高い人とか低い人とか関係なく、みんな自己中心になっていたわけです。そしてその腐敗が宗教的なリーダーたちにまで及んでいました。彼らはみな偽りを言っていました。たとえば、平安がないのに、「平安だ、平安だ」と言っていました。これはある種のマインドコントロールです。主はそのように言っていないのに、そのように言っているかのように偽っていたからです。彼らは神の民の傷をいいかげんに癒していました。民は元気じゃなかったのに表面的に治療して「大丈夫、元気、元気」と言い聞かせていたというか、思い込ませていました。いわゆるやぶ医者と一緒に。ちゃんと治療しないのです。ここでは医者というよりも祭司とか預

言者のことが言われていますから、それは今でいうと教会の牧師とか伝道者ということになります。神様が言っていないのに「大丈夫だよ。神様はあなたのありのままを愛しているから」とか、偽って語るのです。その方が相手も心地よいからです。でもそれはやぶ医者と同じです。神の民の傷をいいかげんに癒しているにすぎません。しかし、真の牧者は民の傷をいいかげんには癒しません。神のことばが言わんとしていることはどういうことなのかをしっかりと受け止め、みことばと祈りによって癒すのです。たとえそれがどんなに聞こえが良くないことでも、神のことばにしっかりと立つことが真の解決につながると信じているからです。

ところで、この「平安」ということばですが、これはヘブル語では「シャローム」と言います。「シャローム」とは、単に戦争がない平和であるとか、心の中が平安であるというだけでなく、その本質は「何の欠けもない理想的な状態」を指しています。そうした完全さ、健全さから来る平安なのです。ですから、争いがなければ平和となり、病気がなければ健康となり、問題が解決すれば勝利となり、祝福に満たされていれば繁栄となります。欠けがあれば完全な状況ではありません。何の欠けもない完全な状態、それが「シャローム」です。

あなたはどうでしょうか。あなたには欠けがあるでしょうか。その欠けが「シャローム」によって満たされるのです。他のもので満たされることはありません。お酒やギャンブル、仕事、お金、趣味などであなたの心が満たされることはありません。あなたの心を完全に満たすことができるのはこのシャロームの君、平和の君なるイエス・キリストだけです。イザヤ書9章6節にこうあります。「ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」ひとりのみどりごとはイエス・キリストのことです。キリストは生まれる700年も前から、私たちに救う救い主として来られることが預言されていました。その名は何でしょうか。その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれます。イエス・キリストはその名の通り、私たちの罪を赦すために十字架にかかれ、三日目によみがえられたことで、この平和をもたらしてくださいました。

また、エペソ2章14～19節にもこうあります。「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

ですから、イエス・キリストだけがシャローム、平和をもたらすことができます。イエス・キリストだけが救いをもたらすことができます。勝利をもたらすことができます。繁栄をもたらすことができる。満たしをもたらすことができるのです。それ以外に平和を得る方法はありません。

キリストは言われました。「28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」(マタイ11:28-29)

皆さんの中に、疲れている人がいますか。重荷を負っている人がいますか。そういう人はイエス様のもとに来てください。イエス様があなたを休ませてください。なぜなら、イエス様は柔和でへりくだっておられる方だからです。イエス様はあなたのためにご自分のいのちまで捨ててくださいました。そりはあなたがいのちを得るためです。ここに「そうすれば、たましいに安らぎを得ます。」とあります。「安らぎ」「平安」それはイエス・キリストにあるのです。

偽預言者は平安がないのに「平安だ、平安だ」と言っていました。彼らは表面的で安易な平安を約束しましたが、そこには本当の平安はありませんでした。悪者には平安がないからです(イザヤ48:22)。真の平安を得るためには、その罪、汚れをきよめていただくかなければなりません。そのために神は救い主を送ってくださいました。その救い主の贖いの業によって罪の赦しを実現したのです。平和がもたらされました。ですから、あなたが真の平安を得たいと思うなら、キリストのもとに来て罪をきよめていただくかなければなりません。これが真のシャロームです。この平和を成し遂げてくださったイエス・キリストに聞くべきです。

世の終わりが近くなると、こうした偽預言者たちが安易な平安を約束しますが、そのような

ことばに騙されてはいけません。平安がないのに、「平安だ、平安だ」ということばに聞いてはならないのです。真の平和はイエス・キリストにあります。この平和の君なるイエス・キリストに聞き従いましょう。それが神のさばきから免れ、神の平安をいただき、幸いな人生を送る鍵なのです。